

アルゼンチン一次産品輸出経済と外国資本

— 食肉冷凍加工産業の形成をとおして —

う さ み こう いち
宇 佐 見 耕 一

はじめに

- I フリゴリフィコ産業成立の背景
- II フリゴリフィコ産業の発展
- III フリゴリフィコ産業の成立と農牧産品輸出経済
おわりに

はじめに

フリゴリフィコ (frigorífico) とは、「冷凍庫」を表わすスペイン語であるが、アルゼンチンでは家畜を加工処理して冷凍・冷蔵食肉を生産する工場の意味でも用いられている。その場合フリゴリフィコの訳語としては、食肉冷凍加工工場とするのが適当であろう（本稿ではフリゴリフィコという語を単独で加工工場または加工業者〔会社〕の意味に使用する）。アルゼンチンにフリゴリフィコ産業が出現したのは19世紀末のことで、同産業の成立によりイギリス市場向けの冷凍・冷蔵食肉輸出は急速に拡大し、冷凍・冷蔵食肉は穀物と並びアルゼンチンの主要輸出品となった。この冷凍・冷蔵食肉輸出の拡大は、穀物輸出の拡大と併せてアルゼンチンに他のラテンアメリカ諸国同様、一次産品輸出が経済成長を主導した典型的な一次産品輸出経済をもたらした^(注1)。フリゴリフィコ産業は、冷凍・冷蔵食肉の生産・流通の要の位置にあり、アルゼンチン一次産品輸出経済の重要な構成要素であったといえる。本稿の課題は、フリゴリフィコ産業の形成史をとおして、イギリスを中心とした

先進資本主義国（資本主義中心国）がアルゼンチンの主要輸出品となった冷凍・冷蔵食肉の生産・流通といかなる関係を持っていたかを検討することにある。これは、アルゼンチンの一次産品輸出経済の特質を解明する作業の一部を構成することにもなり、そのための一事例研究と位置づけることができる。

こうした課題を設定したのは、以下のような問題意識による。すなわち、通常アルゼンチン経済史は、ラテンアメリカ経済史のなかで論じられることが多い。しかし、同時に第2次世界大戦以前におけるアルゼンチンの経済発展は、ヨーロッパ人移民の多さ、原住民社会の影響力の弱さ、また広大なオープンスペースの存在、輸出品が温帯農産品であったことなどからしばしばカナダ、オーストラリア等のいわゆる新開国諸国の経済発展と比較して論じられることも多かった^(注2)。たとえばワイスマンは、1929年世界恐慌以前のアルゼンチンの政治・経済発展パターンを新開国型に分類している^(注3)。

ところが、第2次世界大戦以降、カナダやオーストラリアが先進資本主義国へと発展したのに対し、アルゼンチンは第三世界に分類されるというように、その後の発展経路は大きく異なっている。アルゼンチンの発展経路が他の新開国諸国と異なった原因について、これまで主として第2次世界大戦以降の経済政策に焦点をあてた研究が幾つかなされてきた^(注4)。それに反してこれまでの

比較経済史研究のなかで、アルゼンチンと他の新開国との第2次世界大戦前の経済構造の差異について論じられることは少なかった(注5)。

第2次世界大戦以前、典型的には第1次世界大戦以前の新開国経済は貿易面ではいずれも一次産品輸出に依存していたといえる。もっともこのことは、同時期のカナダなどの経済構造が、一次産品輸出経済期のアルゼンチンと同じであったことを示している訳ではない。また、一口に一次産品輸出といってもその形態や、それが各国経済で持つ意味にも相違があると思われる。以上の点から、事例研究をとおしてのアルゼンチン一次産品輸出経済の特質の解明は、アルゼンチン経済発展研究の観点からのみならず、比較経済史研究の立場からも必要であると思われる。

その際、先進資本主義国がいかなる形態でアルゼンチンの一次産品輸出経済、ここでは具体的に冷凍・冷蔵食肉の生産・流通に係わっていたかという点を議論の中心に据える。なぜなら、後進国(地域)資本主義経済が各国(地域)固有の内部要因をもとに先進資本主義国の強い影響の下に再編されていったことは、後進国経済史研究者に共通する認識であるといえるからである。またこの課題は、新開国諸国が各々イギリスを最大の外部勢力として戴いてきたことから、イギリス経済がいかなる形態でその内部構造に係わってきたかという課題に言い換えることもできる。

イギリス資本の海外支配の形態については生川栄治氏による南アフリカ型、インド型、アメリカ型とそれを3類型に分類した労作がある(注6)。そのなかで比較経済史において新開国に分類されるアメリカの形態は、新開地でありながら急速な資本主義の発展が達成され、イギリス資本が金利生活者の立場に立たされるものと規定されている。それ

と関連して井上巽氏は、同じく新開国に分類されるカナダが第1次世界大戦前にはイギリスの最大の投資先となっていることから、量的な面からみる限りレントナー型海外投資の原型はアメリカ型よりもカナダ型と呼ぶのが適切であるとしている(注7)。また木村和男氏も、イギリスの対カナダ投資のレントナー的性格を指摘し、直接的にはモントリオール銀行群を背景とした中央カナダが、鉄道や金融支配を通じて農業地帯の西部カナダから商業利潤を抽出するとしている。同氏は第1次世界大戦前のカナダを、イギリス・アメリカ両帝国主義に二重に従属するなかで、さらに中央カナダが農業地帯の西部カナダを支配するという三重の支配構造を描いている(注8)。

こうした研究史をふまえて、本稿では外国資本とアルゼンチン一次産品輸出経済の関係、具体的には外国資本がいかなる形態でアルゼンチンの主要輸出品の生産・流通過程と関係していたかをフリゴリフィコ産業の展開を題材として分析する。そのために本稿は以下のような構成をとる。まず、フリゴリフィコ産業が成立するための前提条件、次にフリゴリフィコ産業の成立・展開過程を概観する。続いてフリゴリフィコ産業がアルゼンチンの一次産品輸出経済において果たした役割に触れ、最後に冷凍・冷蔵食肉流通過程におけるフリゴリフィコの地位を検討する(注9)。

(注1) 19世紀末から20世紀初頭にかけて、ラテンアメリカ諸国からイギリスを中心としたヨーロッパ諸国への一次産品輸出が急激に拡大し、それがラテンアメリカ各国の経済発展の主な推進力となった。ラテンアメリカ経済史では、そうした一次産品輸出が経済成長を主導した経済を一次産品輸出経済と呼び、同時期を一次産品輸出経済期と規定している。またアルゼンチンでは、輸出品が農牧産品であったために、一次産品輸出経済の代わりに農牧産品輸出経済という用語も使用している。

(注2) Bunge, Augusto, "Pararero económico argentino canadiense 1908-1926," *Revista de economía argentina*, 第22巻第128号, 1929年2月/Smithies, Arthur, "Economic Growth: Internatinal Comparisons, Argentina and Australia," *American Economic Review*, 第15巻第2号, 1965年5月。この他にも類似の比較研究がある。

(注3) Waisman, Carlos H., *Reversal of Development in Argentina: Postwar Counterrevolutionary Policies and Their Structural Consequences*, プリンストン, Princeton University Press, 1987年。

(注4) Dieguez, Hector L., "Argentina y Australia: algunos aspectos de su desarrollo económico comparado," *Desarrollo Económico*, 第8巻第32号, 1969年1~3月号。

(注5) ディエゲスやワイスマンはアルゼンチンと他の新開国諸国との相違点として大土地所有制の存在を指摘している。Dieguez, 同上書/Waisman, 前掲書。

(注6) 生川栄治『イギリス金融資本の成立』有斐閣1959年。なお、後進資本主義については、大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』調査研究双書216 アジア経済研究所 1973年参照。

(注7) 井上巽「イギリス帝国経済の構造とポンド体制」(桑原莞爾・井上巽・伊藤昌太編『イギリス資本主義と帝国主義世界』九州大学出版会 1990年)。

(注8) 木村和男「カナダ経済の発展(1) 1842~1914」(大原裕子・馬場伸也編『概説カナダ史』有斐閣 1984年)。

(注9) フリゴリフィコ産業のモノグラフとしては、Hanson, Simon G., *Argentine Meat and the British Market: Chapters in the History of the Argentine Meat Industry*, スタンフォード, Stanford University Press, 1938年が優れている。資料としてアルゼンチン農牧協会(Sociedad Rural Argentina)の年報 *Anales de la Sociedad Rural Argentina* にはフリゴリフィコ産業に関する記録の他、農業・牧畜業に関する資料も多く残されている。また、アルゼンチン牧畜史の通史としては、Giberti, Horacio C.E., *Historia económica de la ganadería argentina*, ブエノスアイレス, Ediciones Solar, 1954年がある。そのなかでフリゴリフィコ産業および同産業と関連した牧畜業の発展にも一部言及されている。

I フリゴリフィコ産業成立の背景

1. 冷凍技術の進歩

アルゼンチンにフリゴリフィコ産業が成立するのは1880年代のことである。1876年の輸出をみると、80年代になって急増する農産物輸出はまだ皆無に近く、羊毛と皮革が全畜産品輸出のそれぞれ43%と24%を占め、食肉の輸出は近隣諸国への生体と干し肉の輸出がそれぞれ7%と4%を占めるにすぎなかった(注1)。当時、干し肉はブラジルやキューバ向けに輸出されていたが、ヨーロッパ人の嗜好には合わず、ヨーロッパ向け輸出の道は閉ざされていた。一方、1880年以降実用化された大西洋を越えての家畜の生体輸出にも、輸送中の家畜の体重減少や死亡という問題が常に付き纏っていた(注2)。また、それ以前からアルゼンチンの牧畜業者や政府のなかには、当時世界の食糧輸入の中心であったヨーロッパに食肉を輸出するための保存技術確立を求める強い要求が存在していた。1868年9月にアルゼンチン政府により、6カ月以内に食肉の保存技術を発明または導入したものには正価8000金ペソを与えるという法律が公布された(注3)。また、1877年7月7日にはそれ以降の5カ年間に限り生鮮肉輸出に際しての輸出税を免除する法律が公布された(注4)。

一方、19世紀に入ってからヨーロッパでは冷凍技術の発明・改良が相次いで行なわれ、1870年代にオーストラリア・イギリス間で食肉の冷凍輸送の試みが行なわれた(注5)。また1870年代後半には北米からイギリス向け冷蔵食肉輸出が実用化された(注6)。冷凍食肉輸送を最初にアルゼンチン・ヨーロッパ間で試みたのはフランス人技師チャールス・テリエ(Charles Tellier)であった。1875年に

パリで彼の開発した方法によりアルゼンチン産食肉をフランスまで冷凍輸送することを目的とした株式会社が設立された。翌年同社の冷凍船ル・フリゴリフィック号が、フランスから試食用食肉をブエノスアイレスまで輸送した。しかし、ブエノスアイレスでの試食会では好評を得られず^(注7)、その後同社は内紛を起こしル・フリゴリフィック号の再航海も行なわれなかった^(注8)。

1877年には、同じくフランスのジュリアン・エ・カレ (Julien et Carré) 社のル・パラグアイ号がブエノスアイレス港に入港した。同船での試食会においてフランスから運ばれてきた冷凍食肉の評判はよく、アルゼンチン政府の組織した委員会もその品質を保証したため、直ちにフランスで食肉の冷凍輸送を目的とする株式会社が資本金350万^{フラン}で設立された。その後ル・パラグアイ号の航海も再び行なわれることはなかった^(注9)が、アルゼンチンからヨーロッパへの冷凍食肉輸出は技術的には、このル・パラグアイ号の成功により確立したとあってよい。ル・パラグアイ号の冷凍法は、食肉を摂氏マイナス30度で冷凍する方法であった。この方法は、風味を損ねるものの食肉の長期間保存が可能であり、技術的に比較的容易であった。これに対して、ル・フリゴリフィック号の方法は食肉を摂氏零度で保存する方法で今日チルド法（または冷蔵法）と呼ばれているものに相当する。この方法は、風味の保存の点では優れているものの、食肉の保存期間が短く技術的にも前者と比べ難しい点が多かった。そのため、フリゴリフィコ産業が成立する初期においては技術的に容易なル・パラグアイ号で用いられた方法（冷凍法）が普及していった。

2. イギリス市場と自由貿易

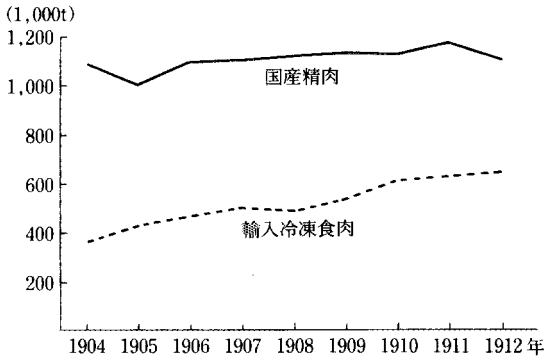
ところで食肉の冷凍輸送技術がフランスの会社

により確立されながら、商業的に失敗している点が注目される。フランス企業による事業化の失敗の原因として、当時「(フランスの——引用者) 牧畜業者の激しい敵意、大衆の懐疑的無関心、投資家の支持の欠如」^(注10)という点が指摘されている。また1910年のアルゼンチン農牧協会年報には「対フランス食肉輸出は、食肉輸入に対する農民政党的反対と関税のため拡大をみなかった」^(注11)との記述もみられる。事実1913年の時点でフランスは、食肉輸入に関して品目制限を行っていた。これらの指摘にもみられるように、フランスではアルゼンチン産食肉輸入に対する農民の反対が強く、それが政治的圧力となってアルゼンチン産食肉の対フランス輸出が阻害されていたといえる。また、ドイツでも19世紀末以降の農業保護拡大傾向の下、食肉輸入は制限されていた。

イタリアはフランスやドイツと比べると冷凍食肉輸入に関して比較的開放的であり、1912年に約2万^{トン}の冷凍食肉を輸入した。しかし、それらは一般市場向けではなく、1911年にイタリア陸軍省が結んだ冷凍肉輸入契約によるものが大きかったという^(注12)。

これに対してアルゼンチン産冷凍食肉の主力市場となるイギリスは、ますます食糧輸入を拡大する傾向にあった。周知のように、産業革命以降のイギリスは人口増加等により食糧需要も拡大し、その拡大した需要は外国からの輸入に依存するようになった。こうした傾向は食肉輸入に関しても同様で、第1図からもわかるようにイギリス産精肉の供給が微増であるのに対して、冷凍食肉の輸入量は1904年（約36万7000^{トン}）から12年（約64万3000^{トン}）にかけて75%拡大している。この間イギリスの農産物輸入は、1846年の穀物法廃止に象徴されるように自由貿易の下に置かれていた。しか

第1図 イギリス市場における国産精肉と輸入冷凍食肉の消費量の推移（1904～12年）



（出所）第1表と同じ（1913年版 256ページ）。筆者グラフ化。

も特徴的なのは、大陸ヨーロッパ諸国が農業保護措置を拡大させる19世紀末に至ってもイギリスは農産物を含む自由貿易を継続したということである。上述したように1880年代以降、ドイツを中心とした大陸ヨーロッパ諸国に農業保護の広まりがみられた結果、農産物に関し自由貿易を維持しているイギリス市場はアルゼンチンの冷凍食肉輸出先として死活的な存在となるのである^(注13)。1913年のアルゼンチン農牧協会年報においても、冷凍食肉輸出に関し「現在のところ、事実上イギリスが確実で重要な唯一の市場」^(注14)と述べられている。

しかし、アルゼンチン側にすれば、冷凍食肉輸出がイギリスに過度に依存することはむしろ危険とみなされていた。対イギリス冷凍食肉輸出で多大の恩恵を受けた大牧場主層も「冷凍食肉輸出市場が唯一つしかないという事実は、冷凍食肉輸出に関連するわが国牧畜業がさまざまな不利益を被っていることを示している。唯一つの買い手のみでは、牧畜業の利益に十分かなう形で輸出価格が設定できない。それゆえ新たなる市場を見つける絶対的必要性が存在するのである」^(注15)とイギリス市場への過度の依存を警戒している。そのため、

アルゼンチン農牧協会を中心に輸出市場多角化のため欧米市場の調査が繰返し行なわれたが、イギリス市場に代わる有力市場は存在しなかった。こうしたことから必然的にアルゼンチンの食肉貿易は、イギリスの自由貿易体制の枠内で実現され、イギリス市場に依存せざるをえないものとなった。

イギリスにおける自由貿易の継続と併せて、アルゼンチンにフリゴリフィコ産業が成立するにはイギリスからの投資も重要な要因となった。イギリスの投資は、当時アルゼンチンへの外国投資のなかで最大であり、1909年にはアルゼンチンの長期間外国投資の65%を占めていた。ただし、投資部門は国債および鉄道が中心で、それらと比べると対フリゴリフィコ投資は量的には少なかった^(注16)。

またフリゴリフィコ産業への投資には後述するようにアメリカも重要な投資国として関係してくる。アメリカの対アルゼンチン投資は、1909年では全外国投資の1%を占めるにすぎず、それが本格化するのは第1次世界大戦以降のことである^(注17)。そのためアメリカによるフリゴリフィコ投資は、アメリカの対アルゼンチン投資の先駆的なものと位置づけることができる。

（注1） Vazquez-Prezado, Vicente, *Estadísticas históricas argentinas, primera parte 1875-1914*, ブエノスアイレス, Ediciones Macchi, 1971年, 69ページ。

（注2） Sociedad Rural Argentina, *Anales de la Sociedad Rural Argentina*, ブエノスアイレス, 1896年版, 177ページ。

（注3） 同上年報 1908年版 5・6月分 42ページ。

（注4） 同上。

（注5） 同上年報 1929年版 5・6月分 213～216ページ。

（注6） Hanson, 前掲書, 40ページ。

（注7） ル・フリゴリフィコ号はメチル・エーテル方式の冷蔵庫3台を装備し、庫内を摂氏零度に保つことが

できた。これは、今日のチルド法に相当するものであり、その保存期間は40日以内が適当とされている。ところが当時はまだそうした知識はなく、試食された食肉も40日以上たったものであったという。

(注8) Sociedad Rural Argentina, 前掲年報, 1908年版, 5・6月分, 42~44ページ。

(注9) 同上年報 1908年版 45~47ページ。

(注10) 同上年報 1913年版 406ページ。

(注11) 同上年報 1910年版 89ページ。

(注12) 同上年報 1913年版 260~272ページ。

(注13) 先進資本主義国の農業問題は大内力編『農業経済論』筑摩書房 1977年, 新興農業国の発展については楊井克巳『世界経済論』東京大学出版会 1961年を参照。

(注14) Sociedad Rural Argentina, 前掲年報, 1913年版, 254ページ。

(注15) 同上年報 1910年版 37~38ページ。

(注16) 1913年の対アルゼンチン累積外国投資は28億3554万金ペソで、そのうちフリゴリフィコ産業に対する外国投資は1419万金ペソ(0.5%)である。Regalsky, Andres Martin, *Las inversiones en la Argentina (1860-1914)*, ブエノスアイレス, Centro Editor de América Latina, 1986年, 51ページ。

(注17) イギリスとアメリカの投資に関しては, Diaz Alejandro, Carlos F., *Ensayos sobre la historia económica argentina*, ブエノスアイレス, Amorrortu Editores, 1975年, 40~46ページ。

II フリゴリフィコ産業の発展

フリゴリフィコ産業の発展は、1880、90年代の成立期、1900~1906年の発展期、1907年以降のアメリカ資本とイギリス資本の併存期に段階区分できる。以下、同産業の発展をこの区分に従い概観する。

1. 成立期(1880、90年代)

第I節で述べた状況の下、1880、90年代に第1表のようにアルゼンチン冷凍肉会社、リバー・プレート生鮮肉会社、アルゼンチン冷凍会社、サンシネナ冷凍肉会社、ラス・パルマス・プロデュース社

の5フリゴリフィコが設立された。このうち創業者がアルゼンチン人またはアルゼンチンの法人でアルゼンチンに株式会社として設立されたフリゴリフィコは3社、イギリス人により株式会社としてイギリスに設立されたフリゴリフィコは2社であった。ただしサンシネナ冷凍肉会社の場合、アルゼンチン・イギリスの資本の企業としている記録が多く、創業者はアルゼンチン人であるがイギリス資本の参加を得ていたとみることができる。

創業者であるアルゼンチン人2人とアルゼンチンの1法人の出自をみると、まずアルゼンチン冷凍肉会社の創業者エウヘニオ・テラソン(Eugenio Terrasson)の場合は、サラデーロ(saladero)と呼ばれる干し肉加工業者から転じている(注1)。サンシネナ冷凍肉会社の創業者ガストン・サンシネナ(Gaston Sansinena)は、ブエノスアイレス市に隣接するリアチュエロ(Riachuelo)川沿いに工場を持つ獣脂加工業者であった(注2)。また、アルゼンチン冷凍会社を組織したアルゼンチン農牧協会とは、エスタンシエロ(estanciero, 大牧場主)の業界団体で、強い政治力を保持していた。このようにアルゼンチン資本の3フリゴリフィコの創業者は全て大牧場主か牧畜産品加工業者という牧畜業関係者であった。その理由として次の2点が考えられる。まず、牧畜業関係者は営業的関連性から同業種内にあるフリゴリフィコ産業への進出が容易であった点である。次に当時のアルゼンチンの輸出品はほとんどが畜産品であり、牧畜業関係者はもっとも資本を蓄積できる立場にあったという点である。

しかし、フリゴリフィコ産業成立期にあっては、フリゴリフィコ各社の経営は不安定であり、アルゼンチン資本の2社が1900年までに操業停止に追い込まれている。アルゼンチン冷凍肉会社は、株

第1表 1880, 90年代に

会社名	創業者(国籍)	資本金(創業時)
アルゼンチン冷凍肉会社 Cía. Argentina de Carnes Congelados	エウヘニオ・テラソン (アルゼンチン*)	25万金ペソ
リバー・プレート生鮮肉会社 River Plate Fresh Meat Co., Ltd.	アルフレッド・ドラブル (イギリス)	20万ポンド
アルゼンチン冷凍会社 Congeladora Argentina	アルゼンチン農牧協会: 大牧場主の利益団体	100万ペソ**
サンシネナ冷凍肉会社 Cía. Sansinena de Carnes Congelados	ガストン・サンシネナ (アルゼンチン*)	不明
ラス・パルマス・プロデュース社 Las Palmas Produce Co., Ltd.	ネルソン兄弟 (イギリス*)	不明

(出所) Sociedad Rural Argentina, *Anales de la Sociedad Rural Argentina*, フェノ
年版 162~164ページ。

(注) *は筆者推定。**金ペソであるかどうかは不明。(1)創業年はa(株式)会社
設立年またはb工場稼働年。(2)工場所在地のキロ数はフェノスアイレス市からの距離。

式会社化される前年の1883年に工場が操業開始し、同年イギリス向けに羊肉を1万1412金ペソ輸出した記録はあるものの、98年には操業を停止している。また、アルゼンチン冷凍会社は、1885年に牛1千頭、羊1万頭を冷凍加工処理して出荷したが、その後破産し1900年時点ではすでに消滅していた(注3)。同社は、アルゼンチン農牧協会という大牧場主たちの団体が中心となって設立された会社であることから、その失敗は後にアルゼンチンの大牧場主たちがフリゴリフィコに対する投資に消極的な態度を示す一因になったのではないかと考えられる。

アルゼンチン資本のフリゴリフィコのみが操業を停止し、イギリス資本のフリゴリフィコが生き残ったのは、以下に述べる初期の厳しい条件の下で生じた、イギリスにおける販売能力を中心とした両者の経営力の差に原因があるのではないかとと思われる。このように、アルゼンチン資本のフリゴリフィコ2社が消滅してしまった結果、1900年時点で操業中のフリゴリフィコはイギリス資本

が2社とアルゼンチン・イギリスの資本1社の3社となり、同産業においてイギリス資本が支配的地位を獲得した。

初期のフリゴリフィコ経営の抱えていた困難さとは、次のようなことである。1880, 90年代にイギリス市場に輸出されたアルゼンチン産冷凍食肉は、まずイギリス国産の生鮮肉と、ついでアメリカ・オーストラリア・ニュージーランド産輸入冷凍肉と競争しなければならなかった。現地で屠殺されたイギリス産生鮮肉の評価が高かったのは当然といえるが、当初アルゼンチン産冷凍羊肉はニュージーランド産冷凍羊肉より低品質との評価を下されたこともあった(注4)。

アルゼンチン産冷凍食肉の競争相手はこれらに留まらず、生体輸出されたアルゼンチン産の生鮮肉とも競合した。生体輸出された家畜はイギリスで解体処理される訳であるから、それだけ鮮度も高く、したがって価格も高かった。1896年にイギリスの市場で冷凍羊肉価格が1^{キログラム}。13~14金ペソであったのに対して、デットフォート(Deptfort)やり

創業したフリゴリフィコ

創業年	本社所在地	工場所在地
1883年b(翌年株式会社化) 1898年操業停止	アルゼンチン	サン・ニコラス 北東210キロ
1882年* a(翌年工場稼働)	イギリス	カンパーナ 北東60キロ
1884年a(翌年工場稼働) 1900年までに破産	アルゼンチン	サラテ 北東75キロ
1884年a	アルゼンチン*	アベジャネーダ 南西郊外
1887年b(93年に株式会社化)	イギリス*	ラス・パルマス

スアイレス, 1908年版, 46~47ページ/同年報 1910年版 124ページ/同年報 1912

バブルで屠殺された生鮮肉の価格は1^{キロ}25~38金^{ペソ}とほぼ2倍の価格差があった。一方、アルゼンチン農牧協会の資料によると、同年の冷凍羊肉1^{キロ}のコストは、家畜代、加工料、輸送料等を含めると1^{キロ}16金^{ペソ}となり、生体輸送された生鮮肉のそれは25.6金^{ペソ}となる(注5)。この資料でみるかぎり、生体肉輸出の場合利益がでるのに対して、冷凍食肉輸出の場合、その販売価格はコストと比べて余りにも低く、赤字となってしまう。このように、この資料からは初期のフリゴリフィコ経営の困難さを見とめることができる。

こうした初期のフリゴリフィコ経営の不安定性は、当時のアルゼンチンの食肉輸出の構成からも窺い知れる。第2表によると、1894年のアルゼンチンからの食肉輸出の約40%は干し肉、また約43%が羊と牛を合わせた生体輸出により占められているのに対して、冷凍肉輸出は約17%を占めるにすぎない。

2. 発展期(1900~1906年)

上述した初期のフリゴリフィコ経営の不安定性

第2表 アルゼンチンの食肉輸出の品目構成(1894年)

品目	輸出量	輸出額 (金ペソ)	%
干し肉	42,838 t	4,564,447	39.7
羊生体	122,218頭	448,678	3.9
牛生体	220,490頭	4,540,160	39.4
冷凍羊肉	36,486 t	1,864,110	16.2
冷凍牛肉	267 t	12,400	0.1
その他冷凍肉	833 t	59,645	0.5
肉紛	719 t	21,562	0.2
合計		11,511,002	100.0

(出所) *Censo de las industrias nacionales*, ブエノスアイレス, 1914年版, 513ページ。

は、1900年を境に急変する。そのきっかけとなったのが、アルゼンチンで1900年初頭より家畜の伝染病口蹄疫(aftosa)が流行したことである。この口蹄疫の流行を理由に、同年イギリスはアルゼンチンからの家畜の生体輸入を禁止する措置をとったため、フリゴリフィコの国内における最大の競争者が瞬時にして消滅する結果となった。一方、生体家畜輸出を行っていたアルゼンチンの牧場

主たちは、この動きがアルゼンチンから生体家畜を輸入している他の諸国に広がることを恐れた。そのためアルゼンチン農牧協会は、農務大臣にそれら輸入国がアルゼンチン産生体家畜の輸入禁止措置をとる前に、自主的に数カ月間生体家畜の輸出禁止措置をとるようにさえ求めた(注6)。

他方、イギリスの生体家畜輸入禁止措置は、アルゼンチンからの対イギリス食肉輸出を冷凍食肉輸出に限定させ、当時操業していた3フリゴリフィコに大きな利益をもたらすこととなった。1902年のアルゼンチン農牧協会年報は当時のフリゴリフィコの活況を次のように伝えている。「フリゴリフィコは相当な資金的余裕を持ったまま株主に40%の特別配当を行ない、一方優れた家畜を供給する牧場主には現行の価格より20%多く支払っている」(注7)。また、別の記事には当時フリゴリフィコが株主に対して50%の高配当を行なっていたとの記述もみられる(注8)。

ただし、この記述で注意しなくてはならないことに、フリゴリフィコが全ての牧場主から以前より高い価格で家畜を購入しているのではなく、優れた家畜の供給者に対して高い価格を支払っていると述べている点がある。したがってこの記事からは、全ての牧場主がフリゴリフィコの活況から恩恵を受けている訳ではなく、その恩恵はフリゴリフィコと取引のあった牧場主の一部に留まり、逆にイギリスの生体家畜輸入禁止措置により打撃を受けた牧場主も多数存在したと考えるのが妥当であろう。

3フリゴリフィコ体制は1902年いっぱい続いたが、フリゴリフィコにとってかかる好条件下、高収益を求めて新たに食肉冷凍加工会社が設立されるか工場の増設が行なわれた。1905年までにイギリス、アルゼンチン、南アフリカ資本により新たに

4社のフリゴリフィコが設立され、さらに既存のサンシネナ冷凍肉会社がクアトロロス(Cuaterros)にフリゴリフィコを増設した。その結果、1905年には7社で合計8フリゴリフィコが稼働することとなった(第3表参照)。

新規に設立された4フリゴリフィコのうち、南アフリカ資本のラ・プラタ冷蔵社を除く3社は、株主がイギリス人とアルゼンチン人からなる合弁企業である。しかし、ラ・ブランカ社とアルゼンチン・スミスフィールド社の場合は払い込み資本金についてはイギリス系資本が多かったこと(注9)から、イギリス系企業とみなすことができる。ラ・ブランカ社の場合、そもそもイギリスの生体家畜輸入禁止措置により危機感を抱いた牧畜業者が中心となって計画されたフリゴリフィコであった。1901年のアルゼンチン農牧協会年報によると、設立の主旨は次のとおりである。「完全なるアルゼンチン資本によって食肉冷凍加工工場を建設しようとする考えは、イギリス政府の生体家畜輸入禁止という事態を前に生じた。それは牧畜産業の要請であり、かつまた国家的要請でもある」(注10)。しかし、「アルゼンチン資本(大部分は牧畜業者の資本——引用者)はこの企業に係わりたくないため」(注11)計画は途中で暗礁に乗り上げ、最終的にはイギリス資本の参加を得て1903年にラ・ブランカ社として操業を開始した。その結果、1905年時点で操業しているフリゴリフィコの多数はイギリス系とみなすことができ、アルゼンチン資本は同産業において副次的役割を果たしたにすぎず、フリゴリフィコ産業発展期においてもイギリス資本が同産業を支配することとなった。

イギリスによる生体家畜輸入禁止とフリゴリフィコ増設により、1900年以降アルゼンチンからの冷凍食肉輸出は急増するが、特に冷凍牛肉輸出の

第3表 フリゴリフィコの資本金および株主の国籍

会社名	工場所在地 ¹⁾	創業年	資本金 (1,000金ペソ)		株主の国籍
			1908年	1912年	
リバー・プレート生鮮肉会社 River Plate Fresh Meat Co.,Ltd.	カンパーナ	1882年 a	2,250	2,250	英
サンシネナ冷凍肉会社 Cia. Sansinena de Carnes Congelados	アベジャネーダ クアトレロ	1884年 a 1903年 b	3,000	4,500	英・亜
ラス・パルマス・プロデュース社 Las Palmas Produce Co.,Ltd.	ラス・パルマス	1887年 b	2,500	2,500	英
ラ・ブランカ社 La Blanca	アベジャネーダ	1902年 a	1,500	1,500	英・亜→米 (1909年)
ラ・プラタ冷蔵社 La Plata Cold Storage Co.,Ltd.	ラ・プラタ	1903年 a	2,003	5,000	南ア→米 (1907年)
アルゼンチン・スミスフィールド社 Smithfield & Argentine Meat Co.,Ltd.	サラテ	1903年 a	1,000	1,250	英 ²⁾
アルゼンチン・フリゴリフィコ社 S.A.Frigorífico Argentino	アベジャネーダ	1905年 b	1,250	2,000	英・亜
ニュー・パタゴニア食肉加工会社 New Patagonian Meat Preserving Co.,Ltd.	リオ・ ガジェーゴス	1909年 a		600	英→米 (1912年)

(出所) 第1表と同じ(1908年版 48~49ページ, 1912年版 163ページ, 1913年版 248ページ)。

(注) 1) フリゴリフィコ工場所在地はサンタクルス州にあるリオ・ガジェーゴスを除いて全てブエノスアイレス州内の地名。2) アルゼンチン・スミスフィールド社の株主の国籍は1908年の資料によると英・亜、12年の資料によると英のみとなっている。

(1)創業年はa(株式)会社設立年またはb工場稼働年。(2)ラ・ブランカ社は1909年にアメリカ資本への移籍に伴い、アルゼンチン冷凍肉会社(Cia. Argentina de Carnes Congelados)に社名を変更した。

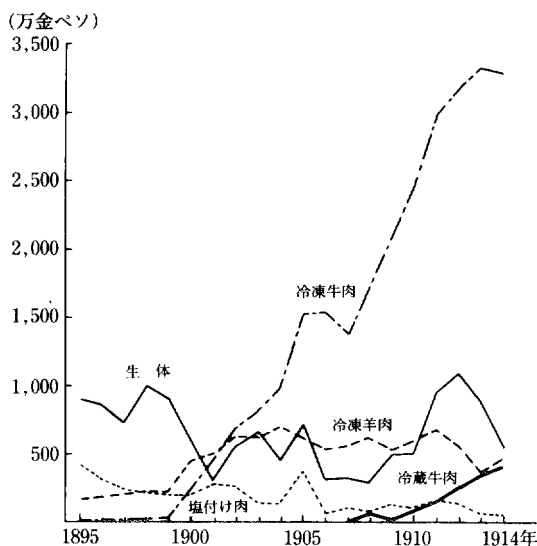
(3)亜:アルゼンチン, 南ア:南アフリカ。

増加は著しかった。第2図からもわかるように、1890年代までは冷凍羊肉輸出が冷凍牛肉輸出を上回っていた。その背景には、1890年代まで冷凍牛肉は生体牛輸出と競合していたということの他に、19世紀中頃よりパンパ地方では羊毛ブームが起り多数の羊が飼育されていたという事情がある。1880年にブエノスアイレス州での牛の飼育頭数が834万頭であったのに対して、羊の飼育頭数は5123万頭に達していた(注12)。また、冷凍加工・輸送技術の確立期においては、牛に比べて体積の小さい羊を冷凍の方が冷凍加工を施すにあつ

て技術的に容易であった(注13)という点も冷凍羊肉輸出優勢の要因と考えられる。

ところが、1900年以降、冷凍牛肉輸出はイギリスの生体家畜輸入禁止措置の恩恵を受け拡大を続けたが、冷凍羊肉輸出はオーストラリアやニュージーランドとの競争により、またパンパ地方における羊毛ブームの終息により停滞を余儀なくされた。パンパ地方における羊毛ブームは農牧業の発展による地価上昇とともに終息しつつあったが、直接的には1900年にフランスで羊毛価格が暴落する一方、パンパ地方において天候不順から1400万

第2図 アルゼンチンの食肉輸出額の推移
(1895～1914年)



(出所) Vazquez-Preledo, Vicente, *Estadísticas históricas argentinas, primera parte 1875-1914*, ブエノスアイレス, Ediciones Macchi, 1971年, 69～70ページ。筆者グラフ化。

頭の羊が死亡するという事件を契機として下火になった^(注14)。これ以降、アルゼンチンにおける牧羊の中心はパタゴニア地方に移行することとなる。冷凍牛肉輸出の急増は、畜産品輸出全体のなかで冷凍食肉輸出の比率を高め、羊毛や生体家畜の比率を低下させた^(注15)。

3. アメリカ資本とイギリス資本の併存期 (1907年～)

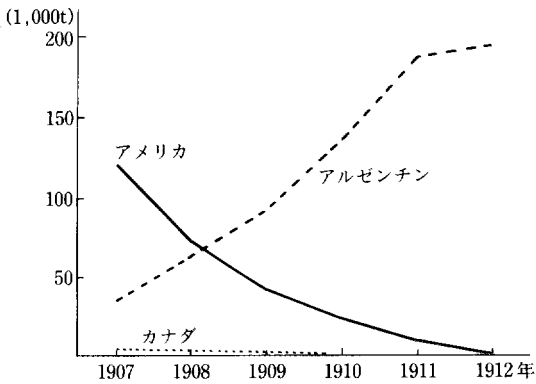
アメリカ資本食肉冷凍加工会社のアルゼンチン進出は、アメリカ産食肉のイギリス市場でのシェア低下とほぼ同時に開始された。アメリカは1871年にイギリス向け冷蔵食肉の輸出を試みていた^(注16)、地理的有利さから当初イギリス市場において優勢であった。また、アメリカの食肉輸出の特色は、冷蔵食肉輸出が主流となった点にある。アメリカは、地理的にイギリスに近く輸送期間も短くて済

むことから、早期から冷蔵法により対イギリス食肉輸出が行なわれていた。しかし、冷蔵食肉は保存温度の低い冷凍食肉と比べて技術的に困難な点が多く、また保存期間も40日と短かったため、商業的冷蔵・冷凍食肉貿易が開始された初期においてはアルゼンチンからの輸出の主流になりえなかった。冷蔵法で保存された食肉は、風味の点で冷凍食肉より優れており、当然その価格も冷凍食肉よりも高かった。

ところで、アメリカではパッキング・ハウス(Packing House)と呼ばれる食肉加工企業が成立し、しかもそれらは寡占状態にあった。1916年のアルゼンチン農牧協会年報によると、主要なパッキング・ハウスとしては、スウィフト(Swift)社、アーマー(Armour)社、モリス(Morris)社、ザルツバーガー(Sulzberger)社、カダイ(Cudahy)社の5社が著名であり、各々2000万～5000万^{ドル}の資本を有していた。これら大パッキング・ハウスは、シカゴ、オマハ、セントルイス等に工場を持ち、上記5社だけで全米の家畜の50%を加工処理していた^(注17)。そしてこれらパッキング・ハウスで加工処理された冷蔵食肉の一部がイギリス市場に輸出されていた訳であるが、アメリカ国内消費の増大によりその対イギリス輸出は急激な減少を示すに至った。

1910年においてイギリスは世界の冷凍・冷蔵食肉取引量の98%、12年において95%を輸入しており^(注18)、第3図による冷蔵牛肉輸出量の推移は、アルゼンチン、アメリカ、カナダのイギリス市場への輸出動向を反映しているとみることができる。アメリカのパッキング・ハウスのアルゼンチン進出は、こうしたアメリカ本国の国内消費の増大による対イギリス冷蔵食肉輸出の大幅減少を補うために生じたものであり、その目的がアルゼンチン

第3図 国別冷蔵牛肉輸出量の推移 (1907～12年)



(出所) 第1表と同じ (1913年版 255ページ)。
筆者グラフ化。

産食肉を輸出することによるアメリカのパッキング・ハウスのイギリス市場でのシェア維持にあったことは明白である。

こうした状況のなかで、1907年にスウィフト社が35万ポンドで南アフリカ資本のラ・プラタ冷蔵社を買収したのを手始めに、スウィフト社を中心としてアメリカ系食肉加工会社の勢力拡張がみられた。1909年には、ウルグアイにある食肉冷凍加工工場フリゴリフィコ・ウルグアアヤ (Frigorífico Uruguay) の支配権をめぐりスウィフト社とサンシネナ冷凍肉会社が競い合った。結局フリゴリフィコ・ウルグアアヤはサンシネナ冷凍肉会社の支配するものとなったが、スウィフト社は同じウルグアイにある干し肉加工工場シビルス・デ・モンテビデオ (Cibils de Montevideo) を買収し、それをフリゴリフィコに転換して1912年より操業を始めた。さらにスウィフト社はフリゴリフィコ・リオ・ガジェーゴス (Frigorífico Río Gallegos) を保有する1909年に設立されたニュー・パタゴニア食肉加工会社の株式の4分の3を12年に取得した (第3表参照) のに加え、サン・フリアン (San Julian) にもフリゴリフィコを建設した^(注19)。

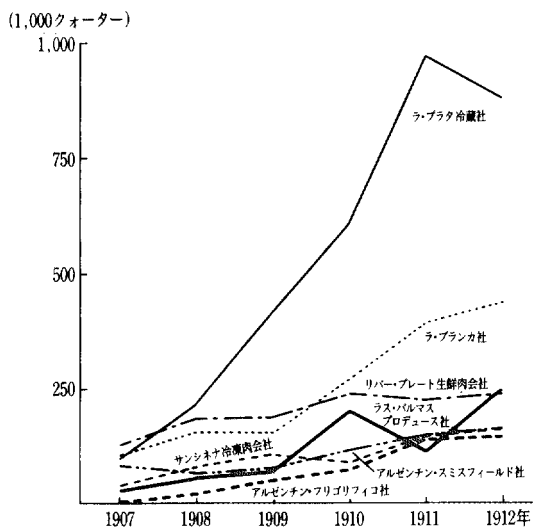
一方、1909年にはアメリカのナショナル・パッキング社 (National Packing Company) によりラ・ブランカ社が買収された (第3表参照)。ナショナル・パッキング社はスウィフト社、アーマー社、モリス社の関連会社によって構成されるトラストで、ビーフ・トラスト (Beef Trust) という名前で知られている^(注20)。ところが、1911年にナショナル・パッキング社はアメリカ国内で牛肉の流通を制限したという理由で告訴された。その訴状が陪審で却下されたが、こうした事態を前に、トラスト側は自主解散を決定し、ナショナル・パッキング社の資産を分割することとなった。1912年に行なわれた同トラストの資産分割の結果、スウィフト社はラ・ブランカ社の経営から撤退し、同社はアーマー社とモリス社の所有となった。

次に、アメリカ資本の進出がアルゼンチン産冷凍・冷蔵食肉流通に与えた影響をみることにする。そもそもアルゼンチンからの冷蔵牛肉輸出は、アルゼンチン・イギリス資本のフリゴリフィコ各社により1900年から開始された。しかし、前述のように「フリゴリフィコは確実な冷蔵保存技術を所有していなかったため」^(注21)アメリカ資本の進出まで、それはアルゼンチンからの食肉輸出の主流になりえなかった。また、それまでイギリス市場におけるアメリカ産食肉の価格は、通常アルゼンチン産食肉のそれを上回っていた。すなわち、1900年におけるイギリス市場での両国産食肉価格は「アメリカ産冷蔵牛肉1*の販売価格が、一級アルゼンチン産冷凍牛肉の価格を13金^{ポンド}上回り、またアルゼンチン産冷凍牛肉価格が同じくアルゼンチン産冷蔵牛肉価格よりも5金^{ポンド}低い」というものであった。そうしたアメリカ産食肉とアルゼンチン産食肉の価格差は、「アメリカにおける肉牛の良好な飼育と良好な加工・保存」によりアメ

リカ産冷蔵牛肉の品質が良いのに対し、長距離を「輸送されてきた（アルゼンチン産——引用者）冷蔵牛肉は品質が悪い」(注22)という事実に基づくものであった(注23)。

アメリカ資本のアルゼンチン進出後、イギリス向けアルゼンチン産冷蔵牛肉輸出は急増するが(第3図参照)、それは主としてアメリカ系フリゴリフィコの冷蔵牛肉輸出増によりもたらされたものであった。1907年には、イギリス資本のフリゴリフィコのリバー・プレート生鮮肉会社が最高の約13万¹/₂の冷蔵牛肉を輸出していた。ところが同年にラ・プラタ冷蔵社がアメリカ資本に移行すると同社の冷蔵牛肉輸出は急増し、アルゼンチン冷凍肉会社(旧ラ・ブランカ社)もアメリカ資本に移行した1909年以降冷蔵牛肉輸出を急増させてい

第4図 フリゴリフィコ各社の冷蔵牛肉輸出量の推移(1907~12年)



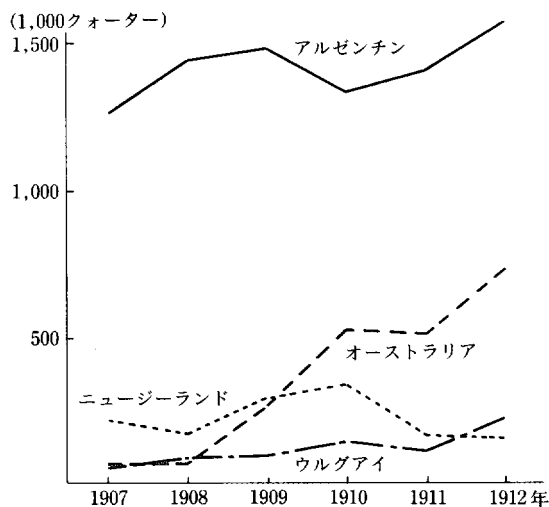
(出所) 第1表と同じ(1913年版 249~250ページ)。筆者グラフ化。

(注) 単位のクォーターは牛の個体の4分の1。
ラ・ブランカ社は1909年にアメリカ資本への移籍に伴い、アルゼンチン冷凍肉会社(Cia. Argentina de Carnes Congelados)に社名を変更した。

る(第4図参照)。その結果1912年の冷蔵牛肉輸出では、同アメリカ系フリゴリフィコ2社で58%を占めるに至った。一方、冷凍牛肉輸出では1912年において同アメリカ系フリゴリフィコ2社のシェアは23%で、1907年の両社のシェア28%よりむしろ低下している(注24)。このように、アメリカ資本のフリゴリフィコは冷蔵牛肉輸出に重点を置き、その輸出を急激に拡大させた。他方、アルゼンチン・イギリス資本のフリゴリフィコは1912年時点でおお冷凍牛肉輸出に重心を置いていた(第5図参照)。

1907年から12年にかけてアルゼンチンの対イギリス市場向け冷蔵牛肉輸出は約450%増加(3万5000¹/₂から19万4000¹/₂へ増加)し、この間アメリカ産冷蔵牛肉輸出が急減したために、アルゼンチン産冷蔵牛肉がイギリスの輸入冷蔵牛肉市場を独占することとなった(第3図参照)。一方、イギリスの輸入冷凍牛肉市場におけるアルゼンチン産冷凍牛肉のシェアは、1912年においても優位を保って

第5図 国別冷凍牛肉輸出量の推移(1907~12年)



(出所) 第1表と同じ(1913年版 255ページ)。筆者グラフ化。

(注) 単位のクォーターは牛の個体の4分の1。

いるものの、オーストラリア産冷凍牛肉輸出の増加によりその比率を低下させている（第5図参照）^(注25)。

このように、アメリカ資本パッキング・ハウスのアルゼンチン進出により、アルゼンチンのフリゴリフィコ産業は米・英両資本の支配下に置かれることとなった。アメリカ資本の進出は、アルゼンチンの対イギリス冷蔵牛肉輸出拡大をもたらしたが、それはアメリカの輸出能力低下という理由の他に、アメリカ資本パッキング・ハウスのイギリス市場でのシェア確保という企業戦略によるものでもあった。また、アメリカ資本のアルゼンチン進出は、それまでイギリス資本が優勢であったアルゼンチン・フリゴリフィコ産業内の寡占構造に変化を与え、1912年頃には冷蔵牛肉を主として生産するアメリカ資本と冷凍牛肉生産が主力のイギリス資本とに区別ができあがった。

(注1) Hanson, 前掲書, 53ページ。

(注2) Sociedad Rural Argentina, 前掲年報, 1910年版, 124ページ。

(注3) 同上年報 1908年版 46~47ページ/同年版 1912年版 162~164ページ。アルゼンチン冷凍会社の初出荷は、イギリス人精肉業者が家畜を処理して冷凍船に積載したとあり、同社が最終的に冷凍設備を建設したかは不明。

(注4) 同上年報 1908年版 46ページ。

(注5) 同上年報 1896年版 161~162ページ。

(注6) 同上年報 1900年版 78~79ページ。

(注7) 同上年報 1902年版 483~484ページ。

(注8) 同上年報 1908年版 47~48ページ。

(注9) Hanson, 前掲書, 133~134ページ。

(注10) Sociedad Rural Argentina, 前掲年報, 1901年版, 272ページ。

(注11) 同上。その理由は、前述のアルゼンチン冷凍会社の破産が影響しているように思われる。

(注12) Sabato, Hilda, *Capitalismo y ganadería en Buenos Aires: la fiebre de lanar 1850-1890*, ブエノスアイレス, Editorial Sudamericana, 1989年, 36ページ。

(注13) Scobie, James R., *Revolución en las Pampas*, ブエノスアイレス, Ediciones Solar, 1968年, 57ページ。

(注14) Giberti, 前掲書, 176ページ。

(注15) 畜産品輸出の構成は以下のとおり。

1899年: 羊毛62.2%, 皮革21.9%, 生体家畜7.9%, 冷凍羊肉2.0%, その他6.0% (うち冷凍牛肉0.3%)。

1906年: 羊毛49.0%, 皮革24.7%, 冷凍牛肉12.9%, 冷凍羊肉4.3%, その他9.1% (うち生体家畜2.6%)。

Vazquez-Preedo, 前掲書, 70ページ。

(注16) Sociedad Rural Argentina, 前掲年報, 1912年版, 160ページ。1871年の輸出は冷凍法か冷蔵法かは不明である。

(注17) 同上年報 1916年版 132~133ページ。

(注18) 同上年報 1913年版 254ページ。

(注19) 同上年報 1913年版 248ページ。

(注20) こうした点に関しては塩見治人「精肉業における管理的調整とカルテル」(同編『アメリカ・ビッグビジネス成立史』東洋経済新報社 1986年)。

(注21) Sociedad Rural Argentina, 前掲年報, 1913年版, 275ページ。

(注22) 同上年報 1911年版 38ページ。

(注23) 同上によると、アルゼンチン産冷蔵牛肉は、「貧しい人々の住む地区の肉屋により低価格で購入される。その結果アルゼンチン産冷蔵牛肉は評判が下がり価格も低い」という状態であった。

(注24) 同上年報 1913年版 249~250ページの表より算出。なお、フリゴリフィコの出荷統計とアルゼンチン貿易統計の間には数年の時差が存在し、この点統計上の問題として残る。

(注25) 1910年代、イギリスが世界の冷凍・冷蔵食肉取引量の大部分を輸入していたことから、第5図も各国の対イギリス冷凍牛肉輸出の推移を反映している。

III フリゴリフィコ産業の成立と農牧産品輸出経済

1. 牧畜業の発展と構造変化

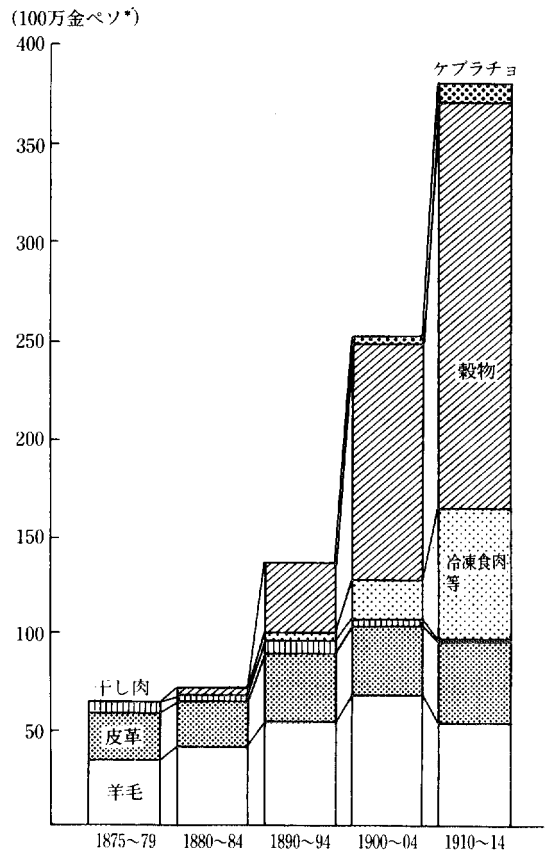
ここで、上述したフリゴリフィコ産業の発展が、アルゼンチン牧畜業にいかなる影響を与えたかを

みることにする。

19世紀末のフリゴリフィコ産業の出現は、まず輸出品の構成に影響を与えた(第6図参照)。1870年代後半におけるアルゼンチンの主要輸出品は羊毛と皮革であったが、その後冷凍・冷蔵食肉輸出が急速に拡大し、1910年代にそれらは伝統的の畜産製品と並ぶ主要輸出品となった。しかし羊毛や皮革輸出は1900年以降停滞的であったので、冷凍・冷蔵食肉輸出拡大が同時期の畜産品輸出全体を拡大させる役割を果たしたといえる。前述したように、イギリスの対アルゼンチン投資に占めるフリゴリフィコ産業への投資の割合はきわめて小さいものであった。しかし、それはアルゼンチンの対イギリス食肉輸出を大幅に拡大させ、アルゼンチンに巨額のポンドをもたらした。この食肉輸出で得られたポンドは、イギリスからの消費財・資本財輸入に使われると同時に、イギリスの対アルゼンチン投資の元本・利子支払いに充当されたと考えられる。

こうしたフリゴリフィコ産業成立に伴う冷凍・冷蔵食肉輸出拡大は、直接的には牧畜生産の在り方に大きな影響を与えた。まず、アルゼンチン牧畜業におけるフリゴリフィコ産業の占める地位からみてみることにする。第7図は1900年以降に全フリゴリフィコとブエノスアイレスにあるリニエルス(Liniers)屠殺場で処理された家畜数の推移を示したものである。リニエルス屠殺場は同名の市場に隣接しており、そこで処理された家畜は近隣諸国に輸出される一部を除き、そのほとんどがアルゼンチン最大の消費地であるブエノスアイレス市に供給される。第7図によると、1900年時点ですでにフリゴリフィコで処理される羊の数は、リニエルス屠殺場で処理されるものを大幅に上回っている。しかし、フリゴリフィコでの羊の処理数

第6図 アルゼンチンの主要輸出品輸出額の推移



(出所) Díaz Alejandro, Carlos F., *Ensayos sobre la historia económica argentina*, ブエノスアイレス, Amorrortu Editores, 1975年, 19ページ。筆者グラフ化。

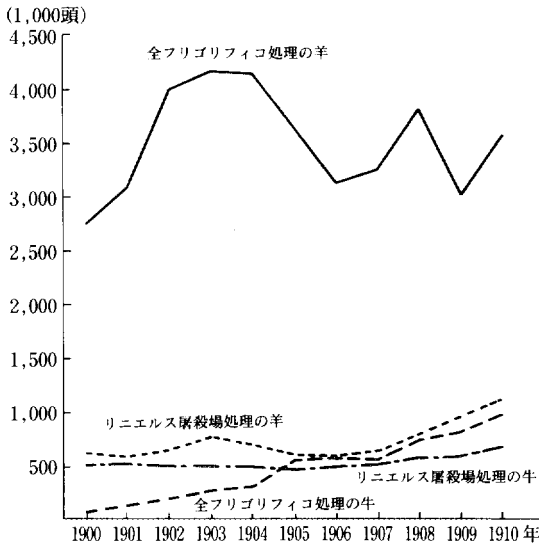
(注) * 1910~14年価格。

冷凍食肉等には冷蔵食肉と缶詰の肉を含む。穀物は小麦、とうもろこし、亜麻、燕麥、大麦、ライ麦からなる。ケブラチヨとは染料タンニンの原料。

は1903年にそのピークを迎え、それ以降は停滞的である。一方、1900年以降10年にかけてリニエルス屠殺場で処理される牛の数はほぼ横這いであるのに対して、フリゴリフィコでの処理数は上昇を続け、1905年にはリニエルス屠殺場でのそれを上回り10年にその約1.5倍に達した。

次に1914年工業センサスに基づき、フリゴリフ

第7図 全フリゴリフィコおよびリニエルス屠殺場での屠殺数の推移 (1900~10年)



(出所) 第1表と同じ (1911年版 313, 316ページ)。筆者グラフ化。

ィコで処理された家畜のうち輸出に向けられる量のみをみる。同センサスによると、1914年にブエノスアイレス州にある8フリゴリフィコに1905年以降サンタクルス州で新たに開設された2フリゴリフィコを加えた合計10フリゴリフィコで処理された若牛と去勢牛は各々124万頭と151万頭で、そのうち輸出されたものの比率は各々82%と91%となっている(注1)。これらのことから、1905年までに主に海外市場を対象としたフリゴリフィコにおける家畜処理数は羊・牛ともに、アルゼンチン最大のブエノスアイレス市場を対象としたリニエルス屠殺場を上回り、フリゴリフィコはアルゼンチン牧畜業にとって需要面できわめて重要な地位を占めるに至ったことがわかる。

こうしたフリゴリフィコで処理された冷凍・冷蔵食肉輸出の増加が、パンパ地方の牧畜生産を刺激したのは明らかであった。牛の飼育数は全国的に1895年から1908年にかけて大幅な増加が見られた

(第4表参照)。地域的には1919年においてブエノスアイレス州だけで全国の3分の1の牛が飼育され、ブエノスアイレス州にサンタフェ、エントレリオス、コリエンテス、コルドバ各州を加えた5州の飼育牛数は全国の約8割を占めていた。

他方、羊の飼育数については全国で1895年から1914年にかけて減少し、その後同一水準を保っている。特にパンパ地方の中心であるブエノスアイレス州とサンタフェ州での飼育羊数の減少は著しく、1895~1908年に両州では大幅な飼育牛の増加がみられたことから、19世紀末から20世紀初頭にかけてパンパ地方中心部の牧畜業において牧牛の重要性が増したことが統計的にも示されている(第4表参照)。19世紀末以降アルゼンチン全体でみた場合、牧羊の中心は南部のパタゴニア地方へ移り現在に至っている。

フリゴリフィコ産業の出現はまた、家畜生産面でさまざまな変化をもたらした。まず、冷凍・冷蔵食肉輸出が主としてイギリス市場を対象となされたことから、イギリス市場に合わせた食用の家畜が導入された。牧羊については羊毛向けのメリノ種から食用のリンカーン種への転換がみられた他(注2)、牧牛においてもショートホーン種、ヘレフォード種、アバディーン・アングス種の導入がみられた(注3)。

こうした食用家畜導入に加えて、フリゴリフィコ産業に適するように家畜の生産形態が変容した。牧牛部門では特に冷蔵法導入以降、クリアドール(criador)と呼ばれる飼育業者とインベルナドール(invernador)と呼ばれる肥育業者に分化する傾向にあった。1939年にペレダはクリアドールの立場から当時の牧牛業内部における分化傾向について詳細な記録を書き残している。それによるとクリアドールとは「牛を繁殖させ、それをイン

第4表 アルゼンチンの主要州における飼育牛・羊数の推移（1895～1919年）
（単位：1,000頭）

州名		1895	1908	1914	1917	1919
ブエノスアイレス	牛	7,745	10,351	9,091	9,518	9,755
	羊	52,630	34,605	18,776	19,044	19,437
サンタフェ	牛	2,315	3,413	3,179	3,316	3,400
	羊	1,989	969	564	594	607
エントレリオス	牛	2,785	3,146	2,334	2,437	2,499
	羊	6,210	7,005	4,304	4,534	4,610
コリエンテス	牛	2,893	4,276	3,543	3,701	3,788
	羊	1,405	3,139	2,349	2,479	2,517
コルドバ	牛	1,885	2,639	2,540	2,670	2,731
	羊	2,595	1,992	1,410	1,521	1,546
全 国	牛	21,702	29,117	25,867	27,053	27,720
	羊	74,380	67,212	43,226	44,855	45,767

（出所） *Revista de economía argentina*, 第9巻, 1922年9月, 236ページ。

ベルナドールに売るまで飼育する」牧畜業者のことであり、インベルナドールとは「クリアドールから成牛を直接、または市(feria)や仲買を通して購入し、それを肥育してフリゴリフィコに売却すること」を主な任務とする牧畜業者のことである(註4)。

もともとクリアドールとインベルナドールの区別は、干し肉生産時代から存在していた。しかし、フリゴリフィコが導入され、それと時期を同じくして導入された牧草アルファルファ栽培の広まりを契機として、干し肉生産向けのインベルナドールは消滅してゆき、フリゴリフィコ向けのインベルナドールが形成された(註5)。また、「純粋なクリアドールと純粋なインベルナドールの間に、さまざまな兼業者がいる」(註6)というように、牧畜業者の実際の形態には多様性があった。

家畜をフリゴリフィコに引き渡す前にインベルナドールで肥育させる過程は、冷蔵法導入とともに一層の広まりをみせた。保存温度が低く長期間保存可能な冷凍法では、家畜飼育サイクルにある程度合わせて家畜を加工処理することができた。

しかし消費者に好まれた冷蔵食肉は、前述したように保存温度が摂氏零度と高いために保存期間が短く、加工処理から販売までを40日以内で完了しなければならないという制約があった。そのため、冷蔵加工においては、1年をとおしてフリゴリフィコに家畜を安定的に供給する必要があり、多年草のアルファルファを持つインベルナドールは冷蔵食肉生産には不可欠な存在となった(註7)。

アルファルファ栽培の効用について1914年産業センサスはアメリカでの報告を引用して次のように述べている。「いかなる国もアルゼンチンのアルファルファによって生産された食肉ほど、量、質、価格の点で優れたものを生産することはできない。アルファルファ栽培は牧草地の飼育能力を3倍から25倍に拡大させ、牧畜業の安定を保障する。他方、アルファルファは比較的不毛な土地や、粗放農業に向かない土地の利用を可能とする」(註8)。同センサスによると、アルファルファの栽培面積は1895年の70万²から1914年には800万²に拡大している。

上記産業センサスではアルファルファは比較的不毛な土地でも栽培可能であると述べているが、あまり湿潤な土地には不向きであるなどの栽培上の制約があり、全パンパ地方にアルファルファ栽培が広まった訳ではない。また、アルファルファの栽培がインベルナドールにとって不可欠であったことから、アルファルファ栽培地域とインベルナドールの多い地域はほぼ一致していたといえる。すなわち、1914年時点でブエノスアイレス州内北西部地方にインベルナドールが多くみられ、南東部地方にクリアドールが集中するというように^(注9)牧牛業内の分業がアルファルファ栽培に基づく地域差となっても現われた。以上みてきたことから、フリゴリフィコ産業の出現により、パンパ地方における牧畜生産が冷凍・冷蔵食肉輸出に適合するような形態に変容したことが確認される。

2. パンパ地方の農業の発展

次にフリゴリフィコ産業成立がパンパ地方の農業に与えた影響について若干の言及を行なう^(注10)。パンパ地方の農業の本格的発展は、フリゴリフィコ産業成立に伴うパンパ地方の牧畜生産の発展および形態変容とほぼ並行して進んだといえる。小麦貿易についてみると、アルゼンチンは1870年代前半まではむしろ小麦輸入国であり、1880年代になってからその輸出の急激な拡大がみられた^(注11)。もともとアルゼンチンにおける本格的な小麦生産は、1860、70年代にサンタフェ州でヨーロッパ移民による植民方式で開始された。しかし、スコビーらも指摘しているように、やがてエスタンシア(estancia)と呼ばれる大土地所有制の下、農業は牧畜と結びつき小作形態で行なわれる方式が広まっていった^(注12)。

小作形態による農業拡大の理由として、ブエノスアイレス州を中心とするパンパ地方における急

激な地価上昇が植民者の自営農化を押しとどめたという点が指摘されている^(注13)。しかし、フリゴリフィコ産業の確立に伴う牧畜生産の形態変容、特にアルファルファ栽培の拡大も、牧畜と結びついた小作形態による農業の拡大を促した。アルファルファ栽培は、播種作業等を伴い、従来までの粗放牧畜と比較し多くの作業を必要としていた。

1892年のアルゼンチン農牧協会年報に、ブエノスアイレス州北西部のエスタンシエロが次のような投稿をしている。「(自らの支出で2~3年小麦やとうもろこしを栽培し、その後耕地をアルファルファ牧草地化している——引用者) 諸氏は、大きな金銭的犠牲を払ってそれをなしているといわざるをえない。なぜなら、農業が賃労働者をもってなされる場合、小麦やとうもろこし等の生産物が常に開墾、播種、刈り入れの費用を賄えるとは限らないことが確認された事実だからである」^(注14)。投稿者のエスタンシアが所在するブエノスアイレス州北西部地方は、前述したように後にアルファルファ栽培を基盤としたインベルナドール地帯となる地域である。この文章から、当時同地域では牧畜部門とともに、エスタンシエロが農業労働者を雇用して農業部門も直接経営し、後に農地をアルファルファ牧草地化していたエスタンシアが存在していたことがわかる。そして主に牧畜業の経営者であるエスタンシエロにとって、農業は危険性が高く忌避されていたことを示している。そこで、この投稿者のエスタンシエロは、危険性の高い農業をエスタンシエロが直接経営するのではなく、それを小作に請け負わせてアルファルファ牧草地を得る次のような手法を提唱している。

すなわち、「まずはじめに土地を有刺鉄線で囲まれた1600~2000^{ヘクタール}の区画に区分する。次にその内部を200^{ヘクタール}の区画に再区分する。その再区分さ

れた土地を自らの農具と資金を持ったイタリア農民に1畝当たり4ペソ、3カ年の期間で貸し出す。そして契約が終了した時には、アルファルファを播種して土地を地主に返還する。ただし、アルファルファの種子代は地主負担とする」(注15)。ここでは、エスタンシエロは牧畜業のみを直接経営し、農業部門は小作に請け負わせている。農業部門を小作に請け負わず利点として、農業の危険を負担する必要がない、地代を得ることができる、そして最終的にエスタンシエロはほとんど負担なしにアルファルファ牧草地を手に入れることができるという点が指摘できる。

こうした方法により、エスタンシエロは自己の粗放牧草地をアルファルファ牧草地化させることができたのだが、同時にそれは農業を拡大させる要因として作用した。そもそもパンパ地方のエスタンシアは基本的に牧畜が生産の中心であり、農業は副次的な存在にすぎなかった。そこにフリゴリフィコ産業の発展とともに、自己の牧草地をアルファルファ牧草地化させる必要性が生じ、上述した小作形態による農業を仲立ちとしてエスタンシエロはこの目的を達成することができたのであった。そのため、牧畜と結びついた小作形態による農業の発達には牧畜業の中心であったブエノスアイレス州で顕著であった(注16)。特にパンパ地方でもっとも地味が豊かでありインベルナドールが集中したブエノスアイレス州北西部地方の自作率は、1904年の農業省アンケートによるとわずか10%にすぎなかった(注17)。

また、農業生産の中心も植民者による農業が最初に発展したサンタフェ州から、前述した農業と牧畜が小作を仲立ちとして結びついた形態が発展したブエノスアイレス州への移行がみられた。アルゼンチンの小麦の播種面積は1870年以降急速

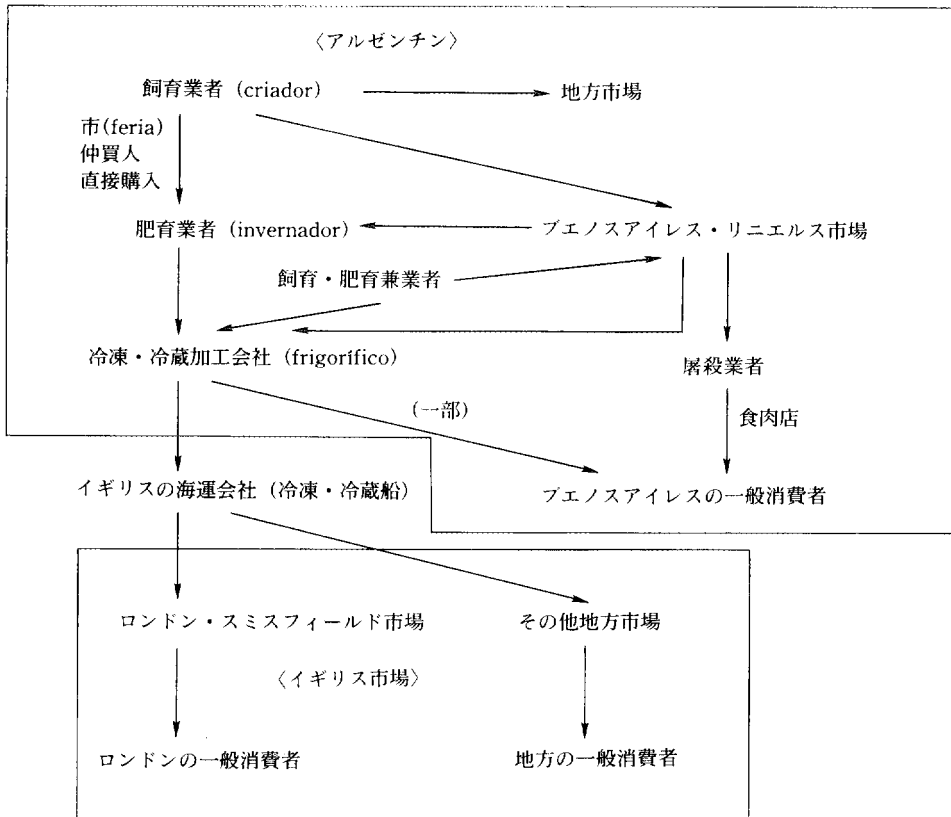
に拡大し、94年にはサンタフェ州のみで全国の57%を占めていた。しかし、1903年以降ブエノスアイレス州がサンタフェ州を抜き、最大の小麦生産州となった(注18)。このように、フリゴリフィコ産業の発展は、牧畜生産の形態を変化させ、それがさらにパンパ地方の農業発展の一因として作用したといえる。

3. 食肉流通におけるフリゴリフィコの支配力

以上、19世紀末以降のパンパ地方の農牧生産の形態が変容したことには、フリゴリフィコ産業が大きく関係していた点について確認した。次に、牧畜業、特に食肉流通部門におけるフリゴリフィコの支配力を検討する。第8図はフリゴリフィコを仲介として、アルゼンチンからイギリス市場へ至る食肉の流通経路を示したものである。アルゼンチン国内市場向けの主要な食肉流通経路は、飼育業者(クリアドール)からブエノスアイレスのリニエルス市場を経て小売業者、一般消費者へ至る流れである。これに対して、イギリス市場向け冷凍・冷蔵食肉の主要流通経路は、まずクリアドールで生産された成牛がインベルナドールへ売却され、そこで体重を増加させる。その後フリゴリフィコに引き渡されて屠殺、解体、冷凍・冷蔵される。そして主としてイギリスの海運会社所有の冷凍・冷蔵船によりロンドンのスミスフィールド市場へ運ばれ、そこから卸売、小売業者を経てロンドンの一般消費者へ至る。

このようにイギリス市場向け冷凍・冷蔵食肉の流通経路は、フリゴリフィコを仲立ちとして、家畜を生産する部分と、加工された冷凍・冷蔵食肉が一般消費者に至る部分に分けることができる。まず、家畜生産部分のクリアドール、インベルナドール、とフリゴリフィコの関係ペレーダの記述に従って試みる。それによると、冷凍・冷

第8図 冷凍・冷蔵食肉の流通経路



(出所) Smith, Peter, *Politics and Beef in Argentina*, ニューヨーク, Columbia University Press, 1969年, 39ページをもとに筆者作成。

蔵食肉輸出価格が低下した時にインベルナドールは政府の介入を求める。しかし、それでも事態が改善しない時にインベルナドールは、「損失や利益の減少を補うために、翌年クリアドールからの牛 (novillo, 2, 3歳の子牛) の買い付けをできる限り安くする」(注19)。このことは、フリゴリフィコと恒常的に取引のあるインベルナドールがクリアドールに対して取引上有利な地位にあったことを示している。

クリアドールに対して優位にあったインベルナドールも、フリゴリフィコに対しては弱い立場にあった。その関係をペレダは次のように記している。インベルナドール側があるフリゴリフィコ

との取引において何らかの不満を感じ、それとの取引を中止した場合、そのインベルナドールには「一般的に他のフリゴリフィコもその扉を閉ざしてしまう。そしてしばらくして後、家畜供給の増減に応じてもとのフリゴリフィコか他のものと取引を再開することができる」(注20)。このことは、インベルナドールとの取引においてフリゴリフィコ側はカルテル的行動をとり、交渉の立場を強化していたことを示している。より一般的にいうと、寡占状態にあったフリゴリフィコは、多数のインベルナドールに対してカルテル的行為がとりやすく、取引上優位にあったといえる。このように家畜生産段階での冷凍・冷蔵食肉流通部分にあって

は、家畜の1次生産者であるクリアドールは2次生産者であるインベルナドールに対して従属的立場にあり、インベルナドールは寡占的フリゴリフィコに対して従属的立場にあったことがわかる。しかし、クリアドールもインベルナドールもアルゼンチン人または移民の牧場主が多数派であり、それらに対するフリゴリフィコの取引上の優位性は基本的に所有関係に基づかないものであった。

次に、フリゴリフィコ工場で加工された冷凍・冷蔵食肉の流通経路の消費者に至る部分、すなわちイギリス市場に至る流通経路をみしてみる。アルゼンチンにある各フリゴリフィコ工場で加工された冷凍・冷蔵食肉は主としてイギリス船籍の冷凍・冷蔵船でイギリスまで輸送される。アルゼンチンのフリゴリフィコ工場は大河川か港湾に隣接して建設されたため、工場から直接冷凍・冷蔵船に冷凍・冷蔵食肉を積み込むことができた。1912年当時全世界で205隻の冷凍・冷蔵船が就航しており、そのうちロイヤル郵船(Royal Mail Steam Packet Co., Ltd.)をはじめとする各汽船会社の冷凍・冷蔵船75隻がイギリス―南アメリカ航路に就航していた^(注21)。

冷凍・冷蔵船で輸送された冷凍・冷蔵食肉は、ロンドンやリバプールなどイギリス大消費地にある港湾に陸揚げされる。貿易業務はフリゴリフィコ自身によってか、またはイギリスの輸入業者を仲介して行なわれる。最大の消費地であるロンドンで陸揚げされた場合、冷凍・冷蔵食肉はスミスフィールド市場か港に隣接した28の冷凍・冷蔵倉庫に一時保管される。フリゴリフィコで貿易業務も兼業していたサンシネナ冷凍肉会社とリバー・プレート生鮮肉会社、また輸入業者のジェームス・ネルソン&サンズ(James Nelson and Sons)社は冷凍・冷蔵倉庫も保有していた^(注22)。

輸入された冷凍・冷蔵食肉は冷凍・冷蔵倉庫で一時保管された後、スミスフィールド市場で卸売業者に販売される。また、ロンドン食肉検査所(London Meat Inspectors Office)による衛生検査が行なわれるのもスミスフィールド市場においてである。スミスフィールド市場で卸売業者に引き渡された冷凍・冷蔵食肉は、小売業者を経て一般消費者に至る。また、フリゴリフィコのほとんどは直営の卸売店を所有しており、イギリス系(一部アルゼンチン資本)のサンシネナ冷凍肉会社18、リバー・プレート生鮮肉会社16、アメリカ系のスウィフト社46の卸売店がイギリス全土に展開し、イギリス系のアルゼンチン・フリゴリフィコ社14、アルゼンチン・スミスフィールド社1の卸売店がロンドンにあった^(注23)。

このようにフリゴリフィコは冷凍・冷蔵食肉流通のイギリスの消費者に至る部分において、代理店に委託する部分に加えて、自ら貿易業務を行ない、倉庫業務、卸売店網を所有するなど直営部門をも所持していた。そのため、冷凍・冷蔵食肉流通の消費者に至る部分では流通の垂直統合が不完全ではあるができていたといえる。こうした消費者に至る部分における流通の垂直統合は、アルゼンチンにおけるフリゴリフィコの寡占体制のひとつの基盤となっていたと考えられる。そして、その寡占体制により所有関係のない家畜生産部分へも強固な影響力を行使しえたと思われる。以上のことから、イギリス資本とアメリカ資本のフリゴリフィコが、冷凍・冷蔵食肉の国際流通を支配し、アルゼンチン国内の家畜の生産・流通にも強い影響力を持っていたという点が確認できた。このことは、冷凍・冷蔵食肉というアルゼンチンの主要輸出品の流通における利潤が、イギリスとアメリカに流出するという構造をアルゼンチンの牧畜経済

が持っていたことを意味する。

(注1) *Censo de las industrias nacionales*, ブエノスアイレス, 1914年版, 532ページ。

(注2) Giberti, 前掲書, 170~172ページ。

(注3) Ortiz, Ricardo, *Historia económica de la Argentina*, ブエノスアイレス, Plus Ultra, 1978年, 191ページ。

(注4) Pereda, Horacio, *La ganadería argentina es una sola*, ブエノスアイレス, 出版社不明, 1939年, 34ページ。

(注5) 同上書 12ページ。

(注6) 同上書 42ページ。

(注7) 同上書 27~28ページ。

(注8) *Censo de las industrias nacionales*, 1914年版, 523ページ。

(注9) Giberti, 前掲書, 202~207ページ。

(注10) 農業と牧畜の関係については, Scobie, 前掲書参照。

(注11) 同上書 208ページ。

(注12) 同上書 61~72ページ。

(注13) 同上書 67~68ページ。

(注14) *Sociedad Rural Argentina*, 前掲年報, 1892年版, 274ページ。

(注15) 同上。

(注16) 1899年から1900年にかけてのサンタフェ州とブエノスアイレス州の自作率はともに39%であったが, 6年後のそれはサンタフェ州で37%, ブエノスアイレス州で26%に低下している。Scobie, 前掲書, 62~72ページ。

(注17) Gaignard, Romain, *La Pampa Argentina*, ブエノスアイレス, Ediciones Solar, 1989年, 368ページ。

(注18) Scobie, 前掲書, 210ページ。

(注19) Pereda, 前掲書, 39ページ。

(注20) 同上。

(注21) *Sociedad Rural Argentina*, 前掲年報, 1913年版, 409ページ。

(注22) 同上年報 1912年版 85~87ページ。

(注23) 同上年報 1912年版 87ページ。

おわりに

以上みてきたように, 19世紀末から20世紀初頭

にかけてのフリゴリフィコ産業の成立・展開は, 冷凍・冷蔵食肉輸出に適合するようにアルゼンチンのパンパ地方の牧畜業の生産形態を変容させ, 間接的に農業の生産形態にも影響を与えた。一方先進資本主義国(資本主義中心国)とアルゼンチン産冷凍・冷蔵食肉流通との関係には次の3つの特徴がみられた。まず第1の特徴は, アルゼンチンのフリゴリフィコ産業は外国資本の支配下であり, 食肉の生産・流通もその影響下にあったという点である。フリゴリフィコと家畜の生産者であるクリアドルおよびインベルナドルとの間には直接的な所有関係がみられなかったが, 家畜購入に際してフリゴリフィコはインベルナドルに対して優位に立ち, インベルナドルはクリアドルに対して優位に立つ, というような関係をとおして, フリゴリフィコは牧畜業全体に強い影響力を及ぼした。フリゴリフィコの家畜生産部門に対する優位の背景として, フリゴリフィコ産業が寡占状態にあったことと, 流通のイギリスの消費者に至る部分が垂直統合化されていた点が指摘できる。そしてアルゼンチンのフリゴリフィコ産業は基本的に米・英両資本により構成されており, アルゼンチン資本は副次的存在にすぎなかった。そのためアルゼンチン産冷凍・冷蔵食肉の国際流通は, 米・英両資本という外国資本の直接的支配下にあり, またアルゼンチン国内での家畜の生産・流通もその影響下にあったといえる。

第2の特徴はこれと関連して, アルゼンチンのフリゴリフィコ産業が米・英両資本によって二分されて支配されていたことである。これは, アルゼンチン産冷凍・冷蔵食肉の国際流通部門という当時の一次産品輸出に依存するアルゼンチン経済の資本蓄積の中枢にイギリス資本に加えてアメリカ資本も食い込んでいたことを示している。フリゴ

リフィコに対するアメリカの投資は、アメリカ資本のアルゼンチン進出が本格化する第1次世界大戦以前の投資という点で異例であり、アメリカ資本のアルゼンチン進出の先駆的事例であった。その背景には、マクロ的にはアルゼンチンの対イギリス冷凍・冷蔵食肉輸出がアメリカ産冷蔵食肉の対イギリス輸出の減少を埋め合わせるという構図のなかで行なわれたという事実がある。また、ミクロ的にはイギリス市場におけるアメリカのパッキング・ハウスのシェア確保というアメリカ資本パッキング・ハウスの企業戦略が存在していた。アルゼンチンとイギリス市場を結ぶ冷凍・冷蔵食肉の国際流通経路の要に位置するフリゴリフィコ産業を、イギリス資本に加えてアメリカ資本までもが支配していたということは、そこで得られる利潤がイギリスのみならずアメリカにも向かったことを意味している。

第3の特徴は、アルゼンチンにおけるフリゴリフィコ産業の成立と対イギリス冷凍・冷蔵食肉輸出の拡大は、イギリス自由貿易体制のなかで実現されたという点である。冷凍・冷蔵食肉の輸出市場が事実上自由貿易を維持し続けているイギリスのみという状態では、アルゼンチン牧畜業のイギリスへの従属度が高まるのは必然的であった。アルゼンチン産冷凍・冷蔵食肉の対イギリス輸出は、アルゼンチンにイギリスのポンドをもたらした。そのポンドはイギリスからの消費財・資本財輸入に一部充当されると同時に、イギリスの対アルゼンチン投資の元本・利子支払いに向けられるという機能を持っていた。すなわち、フリゴリフィコを通してのアルゼンチンの冷凍・冷蔵食肉輸出は、イギリス自由貿易の枠組のなかで、イギリス経済の資本蓄積機構の一環を構成していたといえる。

以上がアルゼンチンにおけるフリゴリフィコ産

業発達史をとおしてみた、アルゼンチン産冷凍・冷蔵食肉の生産・流通と先進資本主義国との関係の特徴である。これらのことは、アルゼンチンの冷凍・冷蔵食肉の国際流通から得られる利潤を、外国（イギリスとアメリカ）が取得する構造をアルゼンチンの牧畜経済が持っていたことを示している。このことは逆にいえば、アルゼンチンの民族資本にとって、冷凍・冷蔵食肉という主要輸出品の流通から、商業利潤を獲得し、資本蓄積を進める機会が限られていたことを意味している。

こうしたアルゼンチンの牧畜経済の構造は、「はじめに」で触れたカナダの事例と相違がみられる。カナダの小麦経済の場合、カナダ経済の対イギリス従属という枠組内においてはであるが、イギリス資本はレントナー化し、小麦の流通過程に現地資本が大きく関与し、そこから得られる商業利潤はまず中央カナダにより抽出されたという^(注1)。これに対してアルゼンチンの牧畜経済の場合、先進資本主義国資本による支配の強さの結果として、現地民族資本による商業利潤の獲得がカナダと比べ進まない構造になっていたと考えられる。もちろん、ここから両国の経済発展経路の相違を論じるには議論が不足している。しかし、少なくともアルゼンチンの一次産品輸出経済は同時期のカナダのそれと比べて、主要輸出品の流通がより直接的にイギリスおよびアメリカという国外勢力に掌握されていたということが出来る。

(注1) ただし、蓄積の主体は金融・鉄道利害であり、それにより直接的に産業資本の成長が促されたという訳ではない。また、中央カナダの農業地帯に対する支配も、イギリス資本借入と対イギリス農産物輸出に基づくカナダ経済の「従属的拡大再生産」過程と強く結びついている点も木村氏は指摘している。木村 前掲論文。

(アジア経済研究所地域研究部)